

指定等の答申をした文化財の概要

重要文化財 ゆすばらはちまんぐう 柞原八幡宮

【所在地】大分県大分市

【年 代】近世以前

柞原八幡宮は大分市西部に所在し、寛延^{かんえん}2年(1749)の火災後に、社殿が順次再興された。本殿は桁行^{けたゆき}五間の後殿^{こうでん}と前殿^{ぜんでん}からなる八幡造^{はちまんづくり}形式の社殿で、嘉永3年(1850)に上棟した。

内部は内陣^{ないじん}と外陣^{げじん}からなり、外部は彩色などで荘厳^{しょうごん}している。また本殿の周囲には、楼門や申殿、宝殿などが、特徴的な配置で建ち並んでいる。

柞原八幡宮の本殿は、類例の少ない八幡造本殿であるとともに、楼門や申殿を軸線上に並べるなど、宇佐神宮^{うさじんぐう}を範とした独特の本殿形式と社殿配置をもつ。また本殿は、縁に「花堂^{かどう}」と呼ばれる小建築を設け、楼門は下層に軒唐破風^{かそうのきからはふ}付の庇を付すなど特異な形式で、顕著な地方的特色を示している。



重要文化財

紙本著色黄瀬川陣

やすだ ゆきひこひつ
安田靱彦筆
ろつきよくびょうぶ
六曲屏風

一双

【所有者】独立行政法人国立美術館（東京都千代田区北の丸公園3-1）
東京国立近代美術館保管

【大きさ】各 縦 166.8cm 横 370.8cm

やすだ ゆきひこ
安田靱彦（1884～1978）は、こばやし こけい
小林古径（1883～1957）、まえだ せいそん
前田青邨（1885～1977）と並んで評価の高い再興日本美術院の日本画家である。

本作品は、昭和16年に開催された再興第28回日本美術院展に出品されたもので、駿河国・黄瀬川における源頼朝、義経兄弟の20年ぶりの対面を一双の屏風絵に描いた靱彦の代表作である。

（近代）



天然記念物 くぐなりはま 十八鳴浜及び くくなはま 九九鳴き浜

【所在地】宮城県気仙沼市

十八鳴浜は、宮城県気仙沼市大初平にあり、気仙沼湾に浮かぶ大島（面積9.05km²）の北東部に位置する鳴砂の浜である。九九鳴き浜は、宮城県気仙沼市唐桑町西舞根にあり、唐桑半島の西部に位置し、大島瀬戸に面した鳴砂の浜である。

どちらの浜も周辺に分布する地質は、中生代ジュラ紀後期の舞根層と小々汐層で、鳴砂の主成分である石英粒子の供給源と考えられる。

十八鳴浜の名前の由来については諸説がある。この浜を歩くと「キュッキュッ」「クックッ」という衣ずれに似たような音を発するところから、「9+9=18」と表現し、「くぐなり」と表音転訛したのと考えられている。また、十八鳴浜の鳴砂は、我が国で初めて学術誌に報告されたもの（『地学雑誌』明治27年）である。九九鳴き浜の名前の由来は、十八鳴浜と同様に、砂浜を歩くと発する「キュッキュッ」や「クックッ」という発音に起因するものと考えられる。

どちらの浜も、地域住民、気仙沼市などが連携した清掃活動などの取り組みが盛んで、保存状況は良好である。



十八鳴浜



九九鳴き浜

重要文化的景観

利根川・渡良瀬川合流域の水場景観

【所在地】群馬県邑楽郡板倉町

群馬県の最東端に位置する板倉町には、利根川と渡良瀬川との合流点に形成された低湿地（水場）が展開している。そのため当地は古くから洪水多発地帯であり、豊かな土壌・生態系が育まれる一方、生活を営むために様々な工夫が行われてきた。当地における人々の居住は縄文時代から確認されるが、広大な沖積低地における集落形成や開墾は、中世末期から近世にかけて実施された築堤や河川の瀬替えによって実現した。近代には大規模な治水事業が行われ、現在に通じる水利システムが完成された。こうした治水事業によって開墾された低地では、主に水田耕作が行われている。水田の中には、河川や沼に面した湿地に溝を掘り、その掘削土を客土（揚げ土）し掘り上げ田を造成した、川田と呼ばれる農地も営まれている。

また、自然堤防上等に形成されている居住地では、屋敷地の一面に土盛りをし、その上に水塚と呼ばれる避難用建物が築造されている。屋敷地の北西にはエノキ・ムクノキなど自然堤防の環境に適応した郷土種や、水防にも有効なタケ類が植栽されており、防風屋敷林として機能している。

このように、利根川・渡良瀬川合流域の水場景観は、大河川の合流域で形成された低地における、水と共生する生活・生業上の様々な工夫によって育まれた、価値の高い文化的景観である。



重要伝統的建造物群保存地区 みなみあいづ まちまえざわ 南会津町前沢伝統的建造物群保存地区

【所在地】南会津町前沢の各一部

【面積】約13.3ヘクタール

南会津町は、福島県南会津郡の最南に位置し、前沢は町南端のたていわ館岩地域に立地する山村集落であり、館岩川の西岸に集落地を開く。

前沢村は、古絵図と伝承から、近世初期には成立していたとされ、江戸時代には、みなみやま南山御蔵入地と呼ばれる天領に属していた。19世紀初頭編纂の『新編会津風土記』は、村内に13軒の家と鹿島神社、薬師堂、ぜんたくし前沢寺があったと伝える。

明治40年の大火で、家屋のほとんどが焼失したが、この大火後、数年のうちに復興されたのが現在の集落で、主屋13棟の再建及び2棟の新築は、南会津地方及び新潟地方の大工13人によりなされたと伝わる。

保存地区は、館岩川、山林、前沢入沢で囲まれる区域を中心とした東西約540メートル、南北約600メートル、面積約13.3ヘクタールの範囲である。

保存地区内には、東西と南北の古道が交わり、この辻を中心に家屋が建ち、その周囲を細かな地割の畑地が取り巻く。

伝統的な主屋は茅葺で、ちゅうもんづくり中門造若しくはすこや直屋である。中門造の主屋は、よせむねづくり母屋を寄棟造、中門を切妻造とするのが基本で、母屋の棟を南北に置き、南側を上手とし、下手に中門を突き出すものが多い。軒高を高くし、壁面は柱や梁、束、密に通した貫を化粧とし、華やかな木組を見せるのが特徴で、直屋も同様の特徴を示す。

南会津町前沢伝統的建造物群保存地区には、明治末期から昭和前期に建てられた中門造と直屋の茅葺民家が混在して建ち、これらの建築群が周辺の耕地、山林、河川等と共に、会津地方南部の雪深い山間部に独特な農村集落の歴史的風致を形成し、我が国にとって価値が高い。

